社会につながる学びを基に
自分の主張を発信できる生徒の育成

―　ＥＳＤの視点に立った学習活動の工夫を通して　―

長期研修員　　佐藤　　淳

《研究の概要》

本研究は、中学校社会科の学習指導において、課題追究の視点や考えの根拠を明らかにして自分の主張を発信できる生徒を育成するために、以下の手立ての有効性について実践を通して明らかにしたものである。

１　社会へつながる学びに向けてＥＳＤの視点を取り入れた単元構想を行う。

２　ＥＳＤで重視する能力・態度を取り入れた「学習管理シート」を作成し運用する。

３　「考察」「議論」「提言」の対話を中心とした協働的な活動を位置付ける。

キーワード　【　社会-中　　ＥＳＤ　　単元構想　　社会につながる学び　】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ０２－０３　令和５年度　２８２集

Ⅰ　主題設定の理由

何のために学ぶのか。学びの目的は一体どこにあるのか。現在の学校教育における学びは、真に世に出た時に役立つ学び、よりよい社会の実現へとつながる学びと言えるのか。

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題された令和３年１月の中央教育審議会答申には、教育に関する我が国の課題として「『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で，『正解（知識）の暗記』の比重が大きくなり，『自ら課題を見つけ，それを解決する力』を育成するため，他者と協働し，自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないか」[1)]という指摘がある。これは「知識を覚えることが目標になり、それを活用して価値にせまることが難しい」「積極的に他者と関わって学びを深めようとする気持ちが弱い」という研究協力校の課題と一致する。

また、本研究に関連する先行研究においても、村山・福田[2)]によって「話し合い活動が好きな生徒の割合が高い一方で，多面的・多角的に思考したり，自分の考えを他者に説明したりすることを苦手にしている生徒の割合が高くなっている（鳥取大附属中）」、七木田・菊池[3)]によって「社会参画をどのようにとらえ，実際の生徒の参画をどのように促していくか，という大きな問題を今後の課題と捉えたい。（岩手大附属中）」といった同様の課題提起がなされている。

これらの課題を解決していくためには、既存の価値観や概念にとらわれず、目の前の課題にためらわず挑もうとする力の育成、すなわち本県の目指す「始動人のかけら」を育てていくような指導の工夫が必要であると考える。これまでにない速度で社会が変化し続ける中、学校教育を通じて子供たちと実社会をつないでいくことは、持続可能な社会の実現に向けた重要な基盤整備と言えるのではないか。

そのような現状を踏まえ、社会科の教科として求められる資質・能力の向上を目指すとともに、社会の在り方や人としての生き方そのものについて、生徒が考えることのできる学習課程の構想が必要であると考え、今回その方法を模索・追究することとした。

「社会につながる学び」を生み出す理念の一つとして、ＥＳＤ「持続可能な開発のための教育」がある。ＥＳＤとは、「六つの視点」（構成概念）と学習指導で重視する「七つの能力・態度」で整理されており、現代社会の問題を主体的に捉え、身近な課題を発見・追究・解決していく過程を通して、学習者の価値観や行動などの変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動を指している。

本研究の目指す「自分の主張を発信できる生徒」の育成を実現するためには、社会につながる学びを生み出すＥＳＤの視点を取り入れた単元構想に沿った学習を行うことが必要であると考える。なぜなら、ＥＳＤの視点に立った学習活動を通して、「答えのない問い」に立ち向かう資質・能力の育成と、社会科としての資質・能力の向上を同時にねらうことができると考えたからである。

そこで、本研究では社会につながる学びについて、ＥＳＤの視点を用いて具体化した単元構想を基に単元計画を作成し、生徒が自分の主張を発信できるようになるためにはどのような手立てが有効であるか探ることを研究の柱として取り組むこととした。

以上のことから、中学校社会科の学習指導において、社会につながる学びの深まりを目指してＥＳＤの視点を取り入れた単元構想や学習管理シートに沿って学習を行ったり、ＥＳＤの中心理念である「過程を重視」した対話を中心とした協働的な活動を意図的に位置付けたりした。そうすることで、生徒は自分自身と実際の社会とのつながりを自覚し、課題追究の視点や考えの根拠を明らかにして自分の主張を発信できると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

中学校社会科の学習指導において、課題追究の視点や考えの根拠を明らかにして主張を発信できる生徒を育成するために、社会につながる学びを生み出すＥＳＤの視点を取り入れ作成した単元構想と学習管理シート、対話を中心とした協働的な活動を取り入れることの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（研究の見通し）

１　ＥＳＤの視点を取り入れた「単元構想」について

ＥＳＤの視点を取り入れた単元構想とは、単元の各過程で行う主な活動と、活動を通して育てたい「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度」とを意図的に結び付けたものである。この単元構想に沿って学習を進めることで、生徒は社会科としての学びを深めることに加え、その先の「社会へのつながり」を意識しながら学習を進めることができるであろう。

２　ＥＳＤの視点を取り入れた「学習管理シート」の活用について

活動内容と結び付いた「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度」を示した「学習管理シート」を活用することで、生徒は「社会につながる学び」を意識しながら単元全体を通して自分の学びを振り返ったり調整したりすることができるであろう。

３　対話を中心とした協働的な活動を位置付けることについて

①主張を展開するための「考察」、②考えを補完・修正するための「議論」、③学びを生かした外部への「提言」の三つの対話を中心とした協働的な活動を段階的に位置付けることで、生徒は根拠を明らかにして考えを整理し、自分の考えの深まりや相手に伝える力の高まりを実感することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　文言の定義

①　「社会につながる学び」とは

本研究では、個人の知識や思考力等を基盤としつつ、他者と関わりながら課題解決に向かう活動を通して、自分にどのようなことができるかを考えたり、社会の在り方や人としての生き方について考えたりする学びの総称を「社会につながる学び」とした。

②　「自分の主張を発信する」とは

本研究における「自分の主張を発信する」とは、単元の課題追究を通して構築した自分の考えを、他者に的確に伝えるために文章化すること、またコミュニケーションスキルを働かせて他者に説明したり提言したりすること全般を指す。

③　「対話を中心とした協働的な活動」とは

本研究における「対話を中心とした協働的な活動」とは、意見交換や他者の意見を聞くなど基本的なものから、多様なコミュニケーションスキルを働かせる必要がある議論や提言など、生徒一人一人の学習状況や目的に応じた形で行う他者との対話を伴う活動全体を指す。

(2)　手立ての説明

①　社会につながる学びに向けてＥＳＤの視点を取り入れた単元構想

社会科の目標に照らし合わせて単元計画を作成する際に、学習を通して身に付けさせたい資質・能力について、生徒が最終的に社会との関わりの中で生かしていくことができるように、「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度」をベースにして学習活動を整理・構築していく（次頁図１）。それにより、生徒が単元の学習過程全体を通して、学習内容のつながりだけでなく自分自身と社会とのつながりを自覚し、課題追究の視点や考えの根拠を明らかにして自分の主張を発信できるようにする。

過　程	学習活動（例）	重視するＥＳＤの視点に即した能力・態度（例）
つかむ	・社会的事象に出合う ・単元の課題を立てる	○　未来像を予測して計画を立てる力
追究する	・資料をもとに情報を収集し関連付ける ・見方・考え方を働かせて課題を考察する ・協働的な活動を通して考えを補完、修正する ・対話や議論を通して他者と協働しながら課題にせまる	○　多面的・総合的に考える力 ○　進んで参加する態度 ○　コミュニケーションを行う力 ○　批判的に考える力 ○　他者と協力する態度
まとめる	・課題の結論について議論し、補完・修正する ・知り得たことを生かして、外部に提言を行う	○　つながりを尊重する態度

図１　ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度で整理した単元構想（例）

②　ＥＳＤで重視する能力・態度を取り入れた「学習管理シート」の活用

単元全体の見通しをもちながら学習を進められるように、学びの拠り所となる「学習管理シート」を活用する（詳細は図２）。生徒が単元の見通しをもって教科としての学習を調整するとともに社会につながる学びを意識していくことができるように、単位時間ごとに「本時で特に育てたいＥＳＤの視点」について、単元構想を基に指導者が設定する。また、記述項目やレイアウトを工夫することで、単元の学習全体を通して教科としての資質・能力と社会参画意識の双方について高まりを自覚できるようにする。

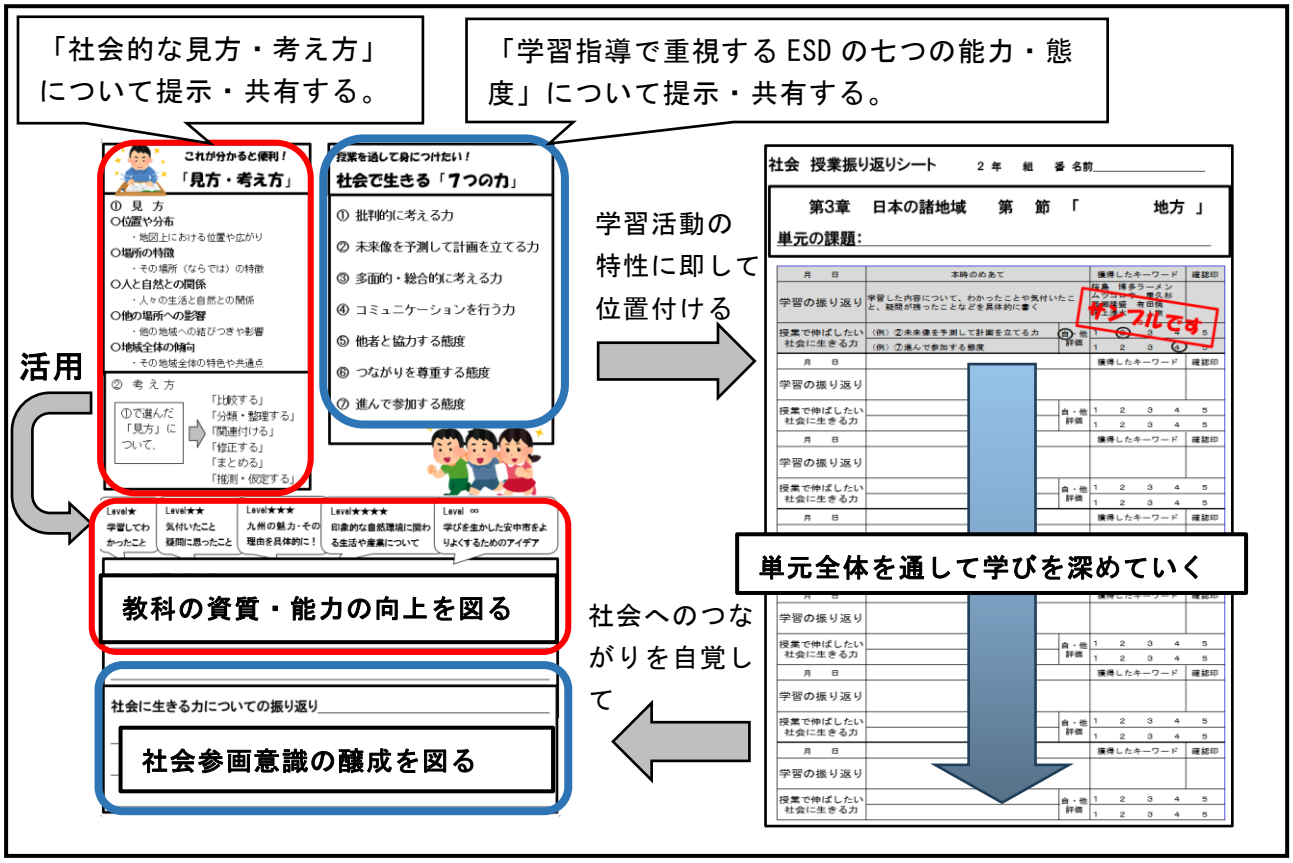
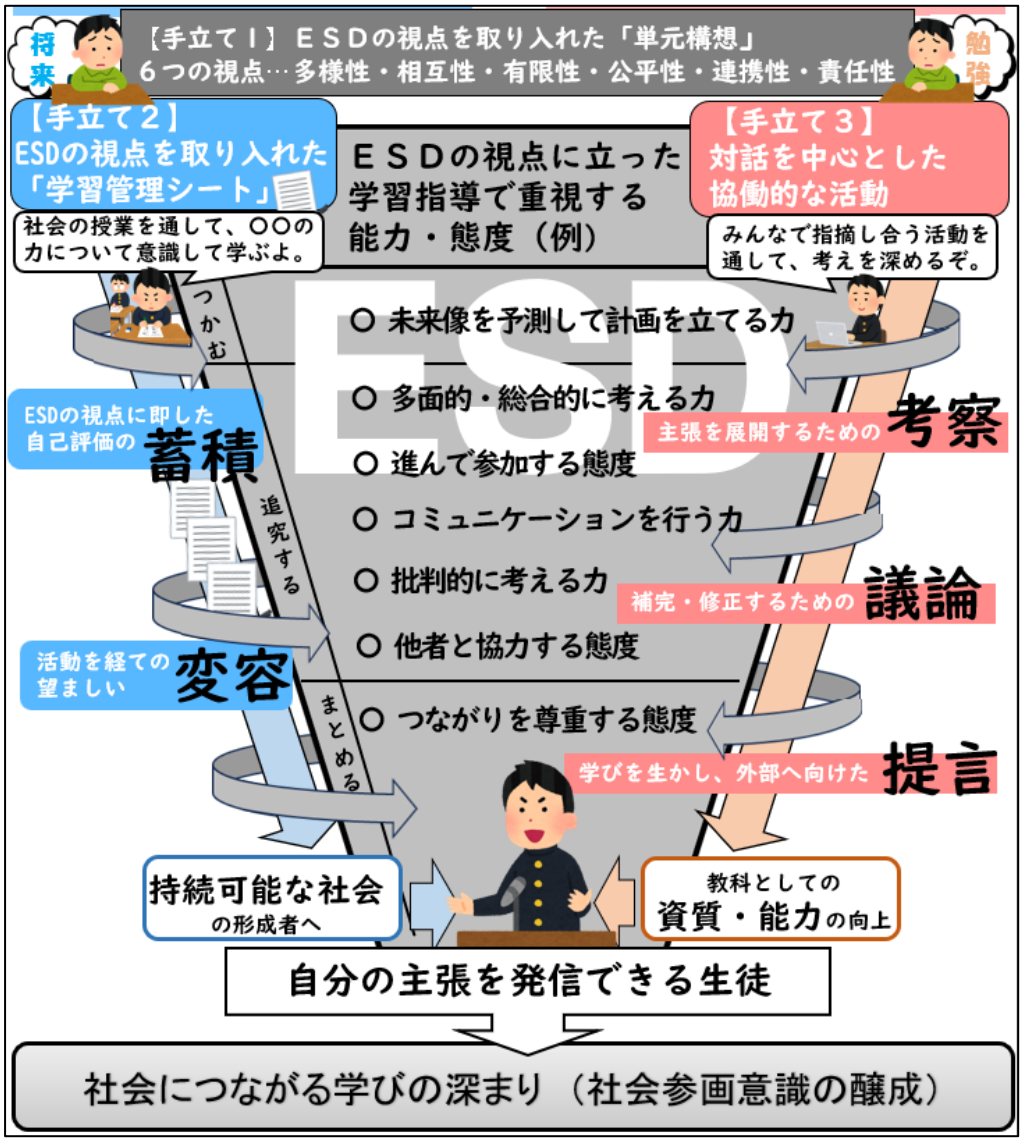


図２　七つの能力・態度を用いた学習管理シート

③　対話を中心とした協働的な活動

主体的に他者と関わりながら追究活動を行うために、単元全体を通して意見交換や他者の意見を聞くなどの対話活動を日頃から取り入れる。その上で、課題追究を進める際に「考察」「議論」「提言」の三つの対話活動を段階的に位置付ける。それにより生徒が根拠を明らかにして考えを整理したり、考えの深まりや相手に伝える力の高まりを実感したりできるようにする。

2　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

1　授業実践の概要

(1)　授業実践Ⅰ

対　　象	研究協力校　第２学年　　148 名（５学級）
実 践 期 間	令和５年７月３日～７月 19 日　　６時間
単　元　名	「　第３章　第１節　日本の諸地域　九州地方　」
単元の目標	・九州地方の自然環境の特色や関連するその他の事象、抱えている課題について理解するとともに、選択した資料について調べたりまとめたりできるようにする。 ・九州地方の自然環境と関連する事象について、人々の暮らしや産業、課題や解決策などを有機的に結び付け、多面的・多角的に考察、表現できるようにする。 ・九州地方に見られる課題を主体的に追究・解決しようとする態度を養う。

(2)　授業実践Ⅱ（指導案提供）

対　　象	研究協力校　第２学年　　148 名（５学級）
実践期間	令和５年 10 月６日～10 月 27 日　　６時間
単　元　名	「　第３章　第４節　日本の諸地域　中部地方　」
単元の目標	・中部地方の自然環境や産業・交通に関連する事象、抱えている課題について理解するとともに、選択した資料について調べたりまとめたりできるようにする。 ・中部地方の三地域について自然環境や交通網、歴史的背景などを有機的に結び付け、人々の抱える課題や解決策を多面的・多角的に考察・表現できるようにする。 ・中部地方に見られる課題を主体的に追究・解決しようとする態度を養う。

２　検証計画

検証項目	検証の視点	検証の方法
見通し１	ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度で学習活動を整理した単元構想は、生徒が社会科としての学びを深めるとともに、自らの社会参画意識を高め、主張を発信できるようになるために有効であったか。	・学習活動の観察 ・アンケートの分析 ・ノートやワークシートの記述 ・「学習管理シート」の記述
見通し２	単元全体を通じて「学習管理シート」を用いたことは、生徒一人一人が主体的に目標を設定して学びの見通しをもったり、教科の学習が「社会につながる学び」となるよう自分自身の学習を調整したりするために有効であったか。	
見通し３	協働的な活動として①主張を展開するための「考察」②考えを補完・修正するための「議論」③学びを生かした外部への「提言」の三つの対話的活動を段階的に位置付けたことは、生徒が根拠を明らかにして考えを整理するために有効であったか。また、生徒自身が考えの深まりや相手に伝える力の高まりを実感するために有効であったか。	

３　評価規準

(1)　授業実践Ⅰ

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・九州地方の自然環境の特色や関連するその他の事象、そこで生ずる諸課題などについて理解している。 ・九州地方について、資料から課題解決に必要な情報を効果的に調べたりまとめたりする技能を身に付けている。	・九州地方について自然環境を中心に域内の事象の結び付き・人々の暮らしなどに着目し、そこに生ずる課題を有機的に結び付けて多面的・多角的に考察、表現している。	・九州地方について見通しをもって学習に取り組み、課題を追究しようとしている。 ・他者の考えを取り入れながら、よりよい社会の実現を目指して課題の解決に向けて主体的に追究しようとしている。

(2)　授業実践Ⅱ

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・中部地方の産業の特色をめぐり、自然環境や交通網との関わりに着目して人々の営みや課題について理解している。 ・中部地方について、資料から課題解決に必要な情報を効果的に調べたりまとめたりする技能を身に付けている。	・中部地方の三つの地域について、自然環境や交通網、また歴史的背景を踏まえて発展の要因や今後の課題等を有機的に結び付けて多面的・多角的に考察、表現している。	・中部地方について見通しをもって学習に取り組み、課題を追究しようとしている。 ・他者の考えを取り入れながら、よりよい社会の実現を目指して課題の解決に向けて主体的に追究しようとしている。

４　**指導計画**（授業実践Ⅱを記載。各単位時間における詳細は別添資料参照）

過程	時間	■ねらい □学習活動 ★ＩＣＴ活用に関する事項	知	思	態	◆評価項目＜方法（観点）＞ ［記］：記録に残す評価 〇指導に生かす評価 ●評定に用いる評価
つかむ	1	■中部地方の自然環境と交通網を概観し、地形・気候の特色を捉えられるようにする。 □資料を基に中部地方の様々な事象に出合うとともに、その傾向や特色について話し合う。また、諸資料を基に学習課題を作成する。（★） ［本時のめあて］ 中部地方の自然環境と交通網について調べ、産業に関する単元の課題を立てよう。 ［単元の学習課題（例）］ 自然環境や交通網を生かした地域産業の取組は、どのように行われているのだろう。			●	◆地図や雨温図、交通に関する主題図を読み取り、中部地方の地域的課題について見通しをもっている。 ＜活動の様子（態）＞ 活用する ESD の能力・態度 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的・総合的に考える力
追究する	2	■「自然環境」「交通網」を中心に三地域の産業と交通網の関わりについて理解するとともに、人々の暮らしや地域の課題と関連付けて整理することができるようにする。 □中部地方に関する様々な事象について、「見方・考え方」を働かせて整理する。また、事象の因果関係や関連性を考えてマップに表現する。（★） ［本時のめあて］ 中部地方の自然環境や交通網は、どのような歴史を経て、どのような産業につながっているのだろう。	●			◆中部地方の自然環境や交通網、歴史的背景を生かした産業や取組について様々な情報を調べまとめている。 ＜マップ（知）［記］＞ 活用する ESD の能力・態度 ③多面的・総合的に考える力 ⑤他者と協力する態度
	3	■「自然環境」「交通網」を中核に、人々の生活や産業に関する事象を関連付け、課題に対する自分の考えを表現（考察）することができるようにする。 □マップにまとめた内容を基に、人々の生活や産業についての自分の考えをまとめる。（★） ［本時のめあて］ 中部地方の自然環境や交通網は、どのような歴史を経て、どのような産業につながっているのだろう。		〇		◆調べた情報やマップを基に、自分の考えを組み立てて表現している。 ＜スライド（思）＞ 活用する ESD の能力・態度 ③多面的・総合的に考える力 ⑦進んで参加する態度

	4	■単元の課題について、他者との対話を通して自分の考えをよりよい内容に補完・修正できるようにする。 □課題に対する考えを他者と共有し、様々な角度から見直し補完・修正を行い、自分の考察をよりよいものにしていく。 ［本時のめあて］ 意見交換を通して、自分の考え（考察）をブラッシュアップしよう。		●		◆他者との意見交流を踏まえて、自分の考えを補完・修正している。 ＜スライド（思）［記］＞ 活用する ESD の能力・態度 ①批判的に考える力 ⑤他者と協力する態度
まとめる	5	■単元の結論を活用しよりよい社会の実現について議論する活動を通して、身近な地域の在り方について考えられるようにする。 □課題について他者と議論する活動を通してよりよい結論を導く。また、「安中市として今後どうあるべきか」という視点で議論し、提言内容をまとめる。 ［本時のめあて］ 中部地方の取組を、他地域（安中市）でも生かしていくにはどうすればよいのだろうか。 ⇩ **［単元の学習課題２］** **（中部地方の取組に学んで）安中市の地域産業は今後どうあるべきか。**		○		◆学習してきたことを生かして提言する内容について話し合い、表現している。 ＜記述（思）＞ 活用する ESD の能力・態度 ①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力
	6	■中部地方の学習を通して学んだことを基に今後の安中市の在り方について自分たちの考えを発信できるようにする。 □中部地方の自然環境と交通網を生かした取組をモデルにして、今後期待される安中市の取組について提言を行う。（★） ［本時のめあて］ 中部地方の学習を通して考えた「これからの安中市の地域産業の在り方」について提言しよう。			●	◆よりよい社会の在り方について、主体的に追究・解決しようとしている。 ＜活動の様子・動画（態）＞ 活用する ESD の能力・態度 ④コミュニケーションを行う力 ⑥つながりを尊重する態度

Ⅵ　研究の結果と考察

１　検証の見通し１について

ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する七つの能力・態度で学習活動を整理した単元構想は、生徒が社会科としての学びを深めるとともに、自らの社会参画意識を高め、主張を発信できるようになるために有効であったか。

(1)　実践の概要

「つかむ」過程では、社会科としての学びの見通しに加え、「学習を通して身に付ける社会で生きる力」の意味や価値を生徒が把握できるように努めた。「追究する」過程では、ウェビングマップの作成を通して見方・考え方を働かせた追究活動を行った。また、課題に対する結論を導いたり、補完・修正したりする場面では、「ブラッシュアップシート」を用いた議論を行い、教科としての学びを深めるとともに社会参画意識を高めることを目指した。「まとめる」過程では、学んだことをもとに「安中市をよりよくするための取組」についての提言を行った。

(2)　結果

学習後に実施した生徒の振り返り記述を分析したところ、全体の 87.4%にあたる 111 名の生徒が学習を通して社会科としての学びが深まった趣旨の記述をしていた（図３）。また、ＥＳＤの視点を活用しやすい単元の課題「安中市への提言」を設定したことにより、「安中市と中部地方の比較」を行う中で、学びの深まりを実感していた生徒が約 50%（111 人中 55 人）いた。

- 中部地方の学習を通して、「今」の安中市に足りない観光業は何かを考えられた。特に、中部地方は地域の特産を生かして観光客を呼んでいたので、安中市も地域の特産を生かすことをやってみればいいと思った。
- 中部地方の産業では、いいところを生かした果樹栽培が行われていることが分かった。中部地方の特産品は人気だけど、安中市の特産品は有名だけど人気がないので自分たちが広めていこうと思いました。
- 中部地方は山が多いため、過疎化が進むようなところが多かった。山が多いことは安中市も同じだから、中部と同じように自然を生かした産業をしていくといいと思った。
- 安中と似ているところが少なからずあり、結び付けて学ぶことがとても楽しかった。中部は３つの気候があり、それを生かして生活しておりとても参考になるなと思った。
- 中部地方の扇状地の使い方のように、安中市も何か作物を作る気候に適しているはず！それを探して、特産物にしていってほしい。
- 中部地方では昔から今にかけて産業が変わってきていることがわかった。どんどんよりよいものにしていくのはとても良いことで安中市にも必要なことだと思う。

図３　学習管理シートの生徒の記述（一部の生徒・原文ママ）

また、実践後に実施した「社会で生きる七つの力を意識したことは学習を進めるうえで役立ったか」という質問に対して、94.4%の生徒が「とても役立った」「ある程度役立った」と回答している（図４）。このことから、ＥＳＤの視点に即した単元構想、つまり「社会で生きる七つの力」を意識した学習活動は、生徒が自らの学びを深めたり、社会参画意識を高めたりするために有効であったと言える。

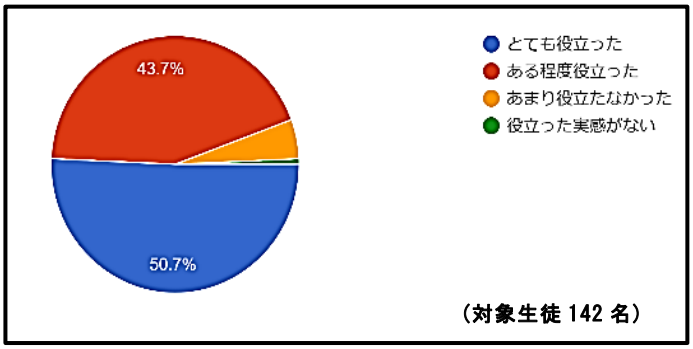


図４　社会で生きる七つの力に対する生徒の意識

研究協力校では、実践Ⅱの期間中に校内文化祭と職場体験学習が実施された。そこで、生かすことができたと感じた「社会で生きる七つの力」について行事終了後にアンケートを実施したところ次のような結果を得た。まず文化祭では「他者と協力する態度」と「進んで参加する態度」の有用感が比較的高く（図５）、一方職場体験では「コミュニケーションを行う力」「進んで参加する態度」の有用感が高かった（図６）。これらの結果から、実践を通してＥＳＤに関する理解や関心が高まり、学習外の実際の場面でも役立つ実感を得られたことが分かる。また、職場体験後の生徒の所感には、「お店の人と話すことで関係を深めていくことが大切」「作業をする時に分からないことを聞くことが必要」「作業の手伝いをさせていただいた時に分担決めでたくさん話す必要があった」など、他者と関わる際には思いや考えを自分から伝える（発信する）ことが重要であることへの気付きが多く記されていた。

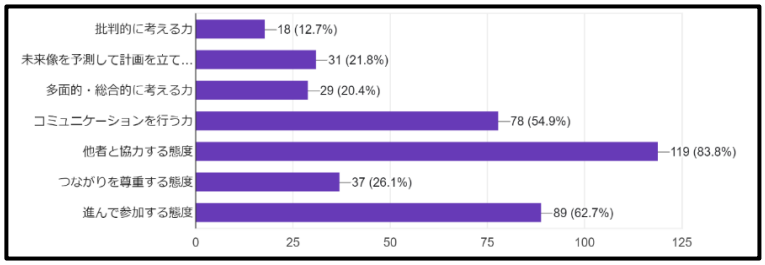


図５　校内文化祭で生きたと感じる力（複数回答）

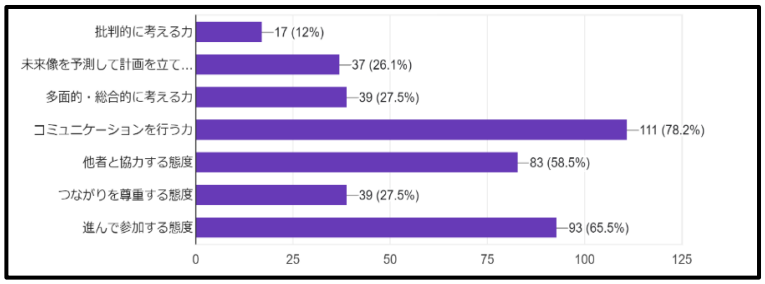


図６　職場体験で生きたと感じる力（複数回答）

(3)　考察

これらの結果から、ＥＳＤの視点を意識した単元構想に沿って学習に取り組んだことにより、生徒たちが教科としての社会科の学習を通して、同時に将来役に立つであろうＥＳＤの視点に即した様々な能力・態度を意識したり、また、それらの力を伸ばしたりすることができることが分かった。具体的には、教科としての単元の課題を「つかむ」過程において、ＥＳＤの七つの能力・態度の中の「未来像を予測して計画を立てる力」や「多面的・総合的に考える力」を働かせていたことが振り返りシートの自己評価や記述から読み取れた。また、「追究する」過程では、考察の内容を互いに読み合い、自分なりに吟味して評価したり、補完・修正するために指摘し合ったりする活動を通して、これまで生徒たちが意識することの少なかった「批判的に考える力」の重要性に気付いていた。これはＥＳＤの視点に即した学習活動に取り組むことで、社会科としての学びが深まった一例であるが、単元の多くの場面で同様の学びの深まりや広がり、あるいは発見があったことが生徒の発言や記述から伺えた。このように、ＥＳＤの視点に即して学習活動を整理・位置付けた単元構想は、生徒の社会科としての学びを深めるとともに、活動を通して社会参画意識を高め、様々な形で主張を発信できるようになるために有効であると言える。

２　検証の見通し２について

単元全体を通じて「学習管理シート」を用いたことは、生徒一人一人が主体的に目標を設定して学びの見通しをもったり、教科の学習が「社会につながる学び」となるよう自分自身の学習を調整したりするために有効であったか。

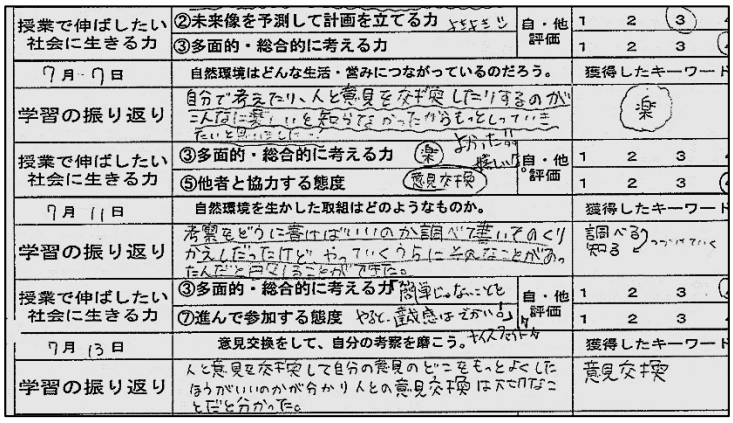
(1)　実践の概要

生徒が見通しをもって学習を調整し、社会につながる学びを実感できるように「学習管理シート」を活用してシート内の「単元の課題」や「前時までの記述」を意識して活動に取り組むよう指導した。また、「本時で特に育てたいＥＳＤの能力・態度」を示すとともに、それらについて振り返りの時間に自己評価を行い、「本時の振り返り」の欄に記述するよう指導することで、社会（将来）につながる能力・態度に関する自身の現状を把握できるようにした。

(2)　結果

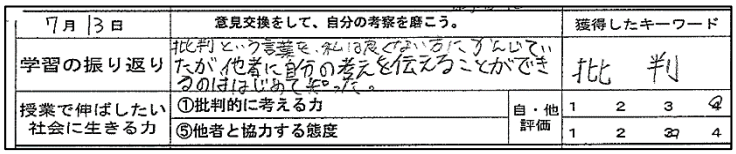
生徒はこれまで社会につながる学びの視点を表立って意識しながら学習した経験はなかったが、単元の学習全体を通して社会科としての学びを調整したり、社会につながる学びの深まりを実感したりしていた様子が「学習管理シート」の記述から読み取れた。

右（図７）に示した生徒Ａの記述内容（実践Ⅰ）からは、社会科の学習を進めながら将来役立つ能力や態度を高めたり育てたりしていくことに対する新鮮な驚きや喜びが記されていた。また、生徒Ｂの記述内容（図８）からは「批判的に考える」ことに対する気付きについて書かれていた。今回の実践で生徒が意識したＥＳＤの視点の中でも「批判的に考える力」が物事を深く理解するために必要であることに関する記述は、多くの生徒に共通して見られたものである。



授業で伸ばしたい社会に生きる力	②未来像を予測して計画を立てる力	自・他評価	1　2　3
	③多面的・総合的に考える力		1　2　3
7月 7日	自然環境はどんな生活・営みにつながっているのだろう。		獲得したキーワード
学習の振り返り	自分で考えたり、人と意見を交換したりするのが楽しいことを知らなかったからもっとしっていきたいと思いました。		楽
授業で伸ばしたい社会に生きる力	③多面的・総合的に考える力	自・他評価	1　2　3
	⑤他者と協力する態度		1　2　3
7月 11日	自然環境を生かした取組はどのようなものか。		獲得したキーワード
学習の振り返り	考察をどうに書けばいいのか調べて書いてのくりかえしだったけどやっていくうちにそんなことがあったんだと思えることが多かった。		調べる
授業で伸ばしたい社会に生きる力	③多面的・総合的に考える力	自・他評価	1　2　3
	⑦進んで参加する態度		1　2　3
7月 13日	意見交換をして、自分の考察を磨こう。		獲得したキーワード
学習の振り返り	人と意見を交換して自分の意見のどこをもっとよくしたほうがいいのかが分かり人との意見交換はたのしいことだと分かった。		意見交換

図７　生徒Ａの学習管理シート記述



7月 13日	意見交換をして、自分の考察を磨こう。		獲得したキーワード
学習の振り返り	批判という言葉を、私は良くない方にすないていたが、他者に自分の考えを伝えることができるのはじめて知った。		批判
授業で伸ばしたい社会に生きる力	①批判的に考える力	自・他評価	1　2　3　4
	⑤他者と協力する態度		1　2　3　4

図８　生徒Ｂの学習管理シート記述

下に示した実践Ⅱの学習管理シート（図９）では、生徒自身の社会で生きる力、すなわち社会につながる学びの獲得状況や変容に関する記述が目立った。実践Ⅰでは「与えられたもの」であったＥＳＤの視点に即した学びが、徐々に自分自身のものとなりつつある様子が記述内容から伺える。

- 今回の社会では前回より批判的に考える力を身に付けることができました。
- 今回は未来像を予測して計画を立てる力を意識しながら授業を受けました。安中市の未来像を予測して計画を立てることができてよかったです。
- 前よりも批判的に考えたり、直した方がよい所を見付けたりすることができた。
- 社会で生きる力は全体的にまだまだ足りないと思いますが、批判的に考える力は考察にコメントする場面で少しは成長できているのかなと思いました。

図９　実践Ⅱにおける学習管理シートの生徒の記述（一部抜粋・原文ママ）

また、上に示した記述に関して「今まで（前回）と比べて…」「私が得意（苦手）なのは…」など、自己の現状や課題に関してメタ認知していると受け取れる記述の発現割合を調べたところ、右図のような結果となった（図10）。特に実践Ⅱ後の振り返りではメタ認知と受け取れる記述の比率が高く、全体の75％の生徒が変容に関する記述をしていた。このことから、「学習管理シート」は自己の学びを振り返って調整したり、深まりを実感したりする習慣を身に付ける効果があることが分かった。

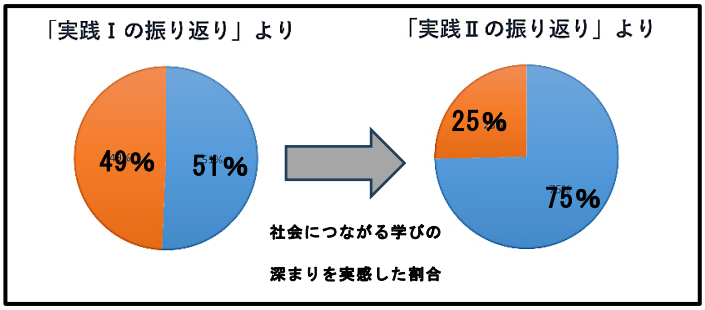


図 10　生徒記述におけるメタ認知の発現推移

加えて実践Ⅰ・Ⅱの後に生徒が記述した文章から「社会で生きる七つの力」に関連する能力・態度の項目の出現回数とその傾向を分析したところ、全体の傾向として各項目において「成果と感じる」生徒が増加したことが分かった。また、「①批判的に考える力」では、実践Ⅰでは課題や次の目標に挙げた生徒が多かったが、実践Ⅱでは成果に挙げている生徒の割合が大幅に増加した。

「②未来像を予測して計画を立てる力」と「③多面的・総合的に考える力」の成果が大幅に上がった理由としては、単元全体を見通して活動に取り組む習慣が身に付いてきたことと、見方・考え方を働かせた追究活動に対する理解が進んだことが要因であると考えられる（図 11）。

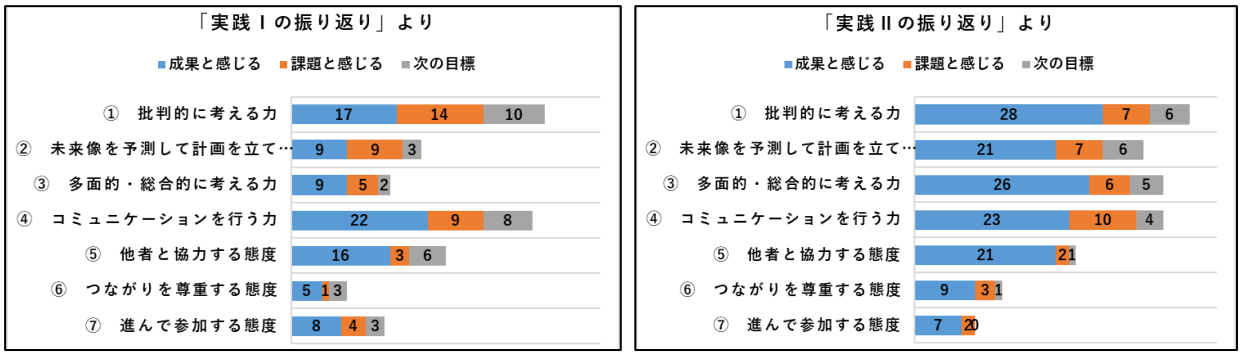


図 11　実践Ⅰ・Ⅱにおける記述分析（単位は人数）

(3)　考察

これらの結果から、生徒がＥＳＤの視点を取り入れた学習管理シートを活用し、単元全体を通して学習の進め方や他者との関わりなど、よりよい学びの在り方について見通しをもっていたことが分かった。記述内容を時系列に沿って分析すると、学習が進むにつれて「教科としての資質・能力」と社会で生きる力、すなわち「持続可能な社会の形成者としての資質・能力」が相乗的に向上していく様子が多くの生徒の記述から読み取れた。また、「今までは」「この次は」など、自らの学びの深まりについて冷静かつ客観的に見取っている様子も多く確認できたことから、ＥＳＤの視点を取り入れた学習管理シートを用いた学びが生徒たちに自然とメタ認知を促す効果があることが分かった。このことから、本シートが生徒にとって単元の前後の学習内容や活動をつなぎ、学びを調整するためのツールとして有効に働いていたことが分かる。このように、ＥＳＤの視点を取り入れた「学習管理シート」を用いたことは、単元の学習を通して生徒が学びの見通しをもち、「社会につながる学び」となるよう自分自身の学習を調整するために有効であったということができる。

3　検証の見通し３

協働的な活動として①主張を展開するための「考察」、②考えを補完・修正するための「議論」、③学びを生かした外部への「提言」の三つの対話活動を段階的に位置付けたことは、生徒が根拠を明らかにして考えを整理するために有効であったか。また、生徒自身が考えの深まりや相手に伝える力の高まりを実感するために有効であったか。

(1)　実践の概要

まず、単元の課題解決に向けて個別に追究活動（ウェビングマップの作成）を行い、それを基に、単元の中心概念となる事象と人々の生活との関わりについて「考察」し、他者へ自分の考えを伝える準備を行った。

次に、導いた考察をよりよい内容にするための「議論」を小グループで行った。ここでは、価値のある議論を生み出すツールとしてブラッシュアップシート（図 12）を作成、活用した。そして、単元を通して分かったことや考えたことを基に、グループごとに「安中市に向けた提言」を行った。単元の「追究する」過程から「まとめる」過程にかけて段階的に対話活動を位置付けることで、最終的に「主張を発信する力」ために必要な技能を負担感や抵抗感が少ない形で身に付けられるようにした。

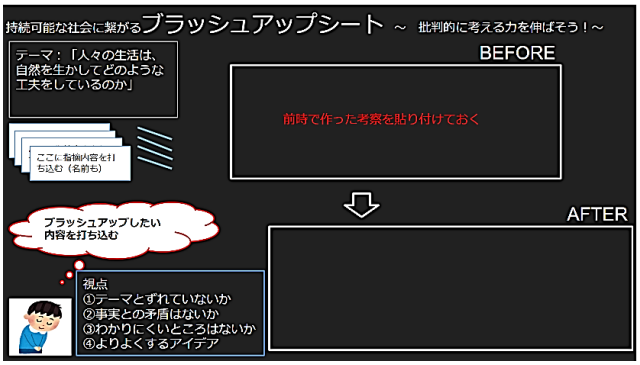


図 12　ブラッシュアップシート

(2)　結果

生徒は右（図 13）のように「ブラッシュアップシート」を用いて考察と議論を行った。まず、左下の「視点」を参考に本人が他者から意見をもらいたい点について「吹き出し」に示し、次にその内容に基づいて読み手が指摘を「付箋」に打ち込むという手順である。「ブラッシュアップシート」を用いて議論を行ったことで、生徒は友達からの称賛や指摘を踏まえて自身の考察を客観的かつ観点を絞って捉え直していた（図 14）。

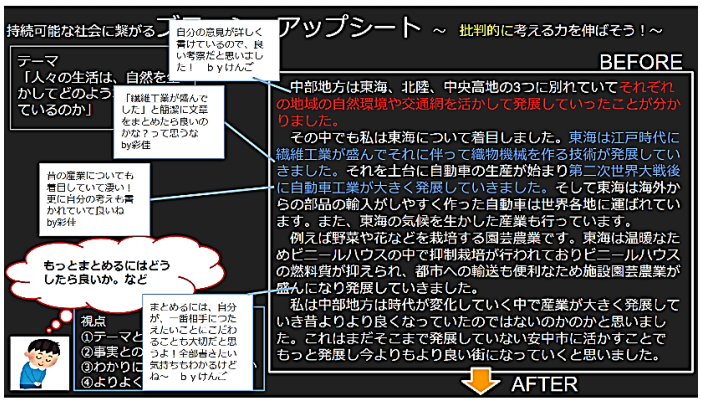
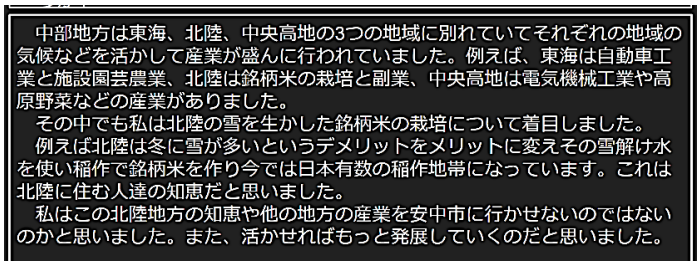


図 13　実際の活用の様子



中部地方は東海、北陸、中央高地の3つの地域に別れていてそれぞれの地域の気候などを活かして産業が盛んに行われていました。例えば、東海は自動車工業と施設園芸農業、北陸は銘柄米の栽培と副業、中央高地は電気機械工業や高原野菜などの産業がありました。
その中でも私は北陸の雪を生かした銘柄米の栽培について着目しました。
例えば北陸は冬に雪が多いというデメリットをメリットに変えその雪解け水を使い稲作で銘柄米を作り今では日本有数の稲作地帯になっています。これは北陸に住む人達の知恵だと思いました。
私はこの北陸地方の知恵や他の地方の産業を安中市に行かせないのではないのかと思いました。また、活かせればもっと発展していくのだと思いました。

図 14　再構成された考察

また、安中市への「提言」を設定したことで、生徒は主張の根拠や提言の具体性などに責任をもちながら学習を進めていた。これまで学びは自分自身のためと生徒たちは捉えていたが、「自分たちが学びから生み出した思いが、他の誰かの役立つかもしれない」という今回の経験を通して、学びが実際の社会とつながる面白さや難しさを実感していた（図 15）。

- 社会に生きる力を意識し、安中市のよりよい未来のために班で協力することはとても勉強になったし、楽しかった。
- 自分たちみたいな中学生でも安中市に貢献できることが実感でき、すごくわくわくした。
- 今提言したからこそ、未来は変わってくるかもしれない。多くの人に自分たちが考えたことを提言できてよかった。
- 将来安中市に住むと思うので、メリットやデメリットが知れてよかった。
- 新しく考えを生み出すだけでなく他地域の考えを僕たちなりに工夫して取り組むことができると思いました。
- 中部地方の取り組みを参考に安中市をよりよくする意見を班で協力して考えられてとてもためになったし、安中市の一員になれた気がしました。

図 15　安中市への「提言」を行った感想（実践事後アンケートの記述・原文ママ）

(3)　考察

これらの結果から、ＥＳＤの視点を取り入れた単元構想において「考察」「議論」「提言」の三つの対話活動を位置付けたことは、社会科の資質・能力と社会参画意識の双方の向上に有効であることが分かった。特に、考察した内容を基に「ブラッシュアップシート」を用いてＥＳＤの能力・態度を意識した議論を行ったことで、これまで単なる意見発表になりがちだった話合いの時間が、明確な目的意識や相手意識のある活動になった。安易に認め合ったり称賛したりするだけでなく、自他の考察の内容が議論を経てよりよいものになるよさに気付いた生徒が増加したことが、多くの振り返り記述から確認できた。また、単元の終末部に位置付けた「提言」によって、生徒は学習した内容を正確に伝える責任を自然と意識し、根拠の適切さや聞き手に意図が正しく伝わる表現方法などについて主体的に議論し考えを深めていた。このように、単元全体を見通して「考察」「議論」「提言」を期待する活動の姿に合わせて位置付けることは、考えを整理してよりよいものにしたり、生徒自身が考えの深まりや相手に伝える力の高まりを実感したりするために有効であると言える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

ＥＳＤの視点に立った学習活動を行ったことで、生徒は発言や記述、議論や提言など様々な形で「自分の主張を発信する」経験を積むことができた。また、それらの経験を通じて、学んだことが実際に社会につながるおもしろさや難しさ、そして大切さを実感することもできた。「教科として社会科を学ぶ」ことと「社会につながる力を身に付ける」ことの両方を意識して学ぶことの意味や価値に気付き、それを楽しみながら学習を進めている様子も多くの生徒の学習管理シートへの記述から見取ることができた。

見方・考え方が「どのように学ぶか」という学びの視点や考え方を示すのに対し、ＥＳＤの視点は「何のために学ぶか」という生徒たちの問いに対する答えを示し、主体的に学びに向かおうとする背中を押してくれる価値があると感じた。事実、実践が進むにつれて以前と比べ主体的に課題追究する姿や、積極的に他者と関わる姿が明らかに目立つようになった。それだけでなく、校内文化祭における合唱コンクールに向けたクラス内の議論や、職場体験における作業・接客対応などの場面において、ＥＳＤの視点に即した「社会で生きる七つの力」は大いに役立っていた。

ＥＳＤの視点は、対話活動にも大きな変化をもたらした。特に「批判的に考える力」は、活動に相手意識や目的意識を生む指針となった。「批判」の本来の意味や価値に触れたことで、今後生徒たちは「耳障りのよい言葉」ではなく、「真に必要な言葉」を選ぶことができるであろう。

単元の終末で、「安中市のよりよい未来」について自分の主張を提言・発信する生徒の姿。それは、持続可能な社会の実現に向けて自分の頭で考え、動き出す姿そのものであった。

２　課題

ＥＳＤの視点に即した学習活動を行う効果をより高めるためには、特定の教科に限定せず、教科横断的なカリキュラム・マネジメントを行い、活動目標や教科特性との関連を整理して実践していくことが望ましい。また、児童生徒の発達の段階に応じて育成するＥＳＤの能力・態度の精選と具体化や、校種の垣根を超えた連携についても、今後は検討していくべきと考える。

Ⅷ　提言

今回は社会科において「自分の主張を発信できる生徒を育成するため」という位置付けでＥＳＤの視点に立った学習活動の工夫を行ったが、この他にも様々な教科・単元において同様の実践が可能である。また、ＥＳＤの視点に立った活動は、学習に限らず、生徒会活動や学校行事、部活動や地域連携など様々な分野・領域でも今後大いに活用することが期待できる。

本研究の成果と課題点を踏まえ、より多くの方に「社会につながる学び」に関する研究や実践をしていただければ幸いである。

＜引用文献＞

１）中央教育審議会(2021)　「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)」　文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf　(2022-05-13)

２）村山 明生・福田 仁　「社会科授業で SDGｓをどう扱う～地理的分野の取り組み～」『鳥取大学付属中学校研究紀要』No52　27-32

３）七木田 俊・菊地 洋　「社会参画の意識を高めるための授業づくりー『当事者』として考えるまちづくりー」『教育実践研究論文集』６巻　51-56

＜担当指導主事＞

西原　和久　　阿左見　充良